

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

みなさんの家では新聞を取っていますか？ 取っていない家庭が多いと思います。今はインターネットが普及ふくふしているので、わざわざ新聞を取らなくても、ネットで無料の情報が好きなだけ検索けんさくできるようになっています。

「新聞なんて、必要なの？」そんな声も聞こえてきそうですね。でも新聞はやはり必要だと私は思います。ネットにメリッ注1トがあるように、新聞にもメリットがあるんです。

そのメリットは何かというと、ひとつにはネットの画面で見ると、紙に印刷された文字で読むほうが記憶が定着きおくする①とです。

ネットの情報はどうしても画面をサーッと流してしまいがちです。感覚的に文字が頭にひっかからないので、記憶にあまり残らない。サーッと読めてしまうのが、ネットの良いところでもあるのですが、記憶に定着するかどうかという点で見たら、紙に印刷されたもののほうが、圧倒的に有効あつとうなのではないでしょうか。

なぜかという、紙に印刷されたものは、文章が書いてあった場所や形を記憶にとどめやすいからです。

みなさんも新聞の紙面を思いだしてみてください。見出しの位置や大きさがみな違ちがいますし、記事がタテ長だったり、横長注2だったり、レイアウトがいろいろですね。みな違うので、記憶にひっかかるフック注3がたくさんあるのです。

教科書もそうですね。私は世界史や日本史を勉強するとき、「あの話は教科書の右上に書いてあった」「あの項目こうもくは左すみにあつた」など、場所や位置で記憶していました。

でももしそれらの事項がバラバラにタブレット注4の画面に出てきたら、ものすごく記憶しづらかったと思います。ネットの場合、全部が横書きの同じパターンで出てくるので、メリハリがなく、記憶に残りにくいのです。

たとえば、新聞の面は住宅地で、そこに掲載けいさいされている記事は家のようなものです。新聞の場合はいろいろな形の家がさまざまなレイアウトで存在しているので、和風テイスト注5のあの家とか、赤い屋根の洋館のあの家などと、ひとつひとつが記憶しやすい。

一方、ネットの記事は整理されているので、同じ形の家がずっと続いていくような感じですが、A 人工的な街なみなので、どの家をとっても記憶しづらいのです。

新聞のほうがい러ろな記事を、航空図のように一覽できる良さがあります。

この「一覽性」が新聞のメリットです。ぱつと開いたときに全体を見通しやすいので、ざつと見出しを見て、その中でセレクトして記事を読むことができます。^{注6}

ネットは順番に流して見ていくことしかできませんから、新聞のような一覽性はないわけです。

もちろんネットにも良い点があります。記事を検索することにかけてはネットの□に出るものではありません。過去の記事の検索はネットなら一発でできます。関連する記事をまとめて読むこともできます。

これが新聞だと、図書館まで行って、いちいち他の新聞を調べたり、過去の縮刷版を広げなければいけません。その手間たるや、考えただけで気が遠くなります。ネットがない時代は、一日中、図書館にこもってそんなこともしていたわけです。そう考えるとネットのベンリさははかりしれません。でもだからといって、ネットだけで事足りるわけではないと私は思います。

印刷された新聞ならではの良さがある。それを忘れてはいけないと私は思います。

新聞を読むメリットはそれだけではありません。新聞を読んでいると、毎日情報が入ってくるので、「情報感度」が上がって、人と深い話ができるのです。新聞を読んでいる者同士であれば、当たり前前に政治や経済の話ができます。

でも一人が新聞を読んでいてもう一人が読んでいなければ、そういう話はできません。

「この人、ニュースを知らないな」と気づかれると、そもそも相手はそういう話題はふってこないし、仮にしたとしても、ギロンは深まりません。

そうなりますと、どうしても社会以外のこと話題が行ってしまいます。「あのお店は美味しいよ」とか「最近、元気？」とか、ごく日常的な話題ばかりになってしまい、そういう次元の話ばかりしていると、社会に向けて意識が向きづらくなります。

今、まさに私は大学でこのことを痛感しているのです。今の大学生は新聞でニュースをざつと読む^⑤シウウカンがないので、急に「英国のEU離脱問題^④について説明してください」と言っても、深い話ができませんのです。

B、こうした大学生たちも、新聞の切り抜きを二週間やるだけで、格段に中身の濃い話ができるようになります。かつては日本のほとんどの世帯が新聞を取っていて、毎日の事件や出来事、社会の動きの情報を共有していました。刻一刻移り変わる社会の情報をみなが共有することで、人々の会話が成り立ち、日本の政治、経済を下支えしていたのです。

各家庭にはもちろんのこと、行く先々にも新聞があるのは当たり前でしたから、大学や会社にも新聞はあるわけで、家で読めなければ、そこで読んだり、ツウキン時に読むのも日常の光景でした。

ちなみに私が東京に出てきた頃は、電車の中で新聞を読む人がたくさんいました。今はみんなスマホをいじっています^④が、当時はかなりの人が新聞を読んでいたのです。

しかも満員電車の中で、新聞をタテに四つ折りにして、周りの人に迷惑をかけないよう読む名人芸の人もたくさんいました。当時の人たちは満員電車の中でさえ、新聞を読みたいと思っていたんですね。

(齋藤孝『新聞力』)

* 出題にあたり、一部本文を改めた所があります。

注1 メリット＝長所。

注2 レイアウト＝新聞・雑誌などの記事の配置。

注3 フック＝ものをひっかけるのに使う器具。

注4 タブレット＝液晶画面にさわって操作する携帯型情報端末のこと。

注5 和風テイスト＝和の雰囲気がある。

注6 セレクト＝選ぶこと。

問1 〰〰〰線a) e)のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 A・Bに入れるのに最も適当な言葉を、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

ア だから イ しかし ウ つまり エ なぜなら

問3 に入れるのに最も適当な言葉を、次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 前 イ 後 ウ 左 エ 右 オ 横

問4 線①「紙に印刷された文字で読むほうが記憶が定着する」とありますが、それはなぜですか。理由を本文中から三十六字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。(、をふくみます)

問5 線②「そんなこと」とはどのようなことですか。三十字以内で答えなさい。(、や。もふくみます)

問6 線③「新聞の切り抜きを二週間やるだけで、格段に中身の濃い話ができるようになります」とありますが、それはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 新聞の切り抜きをすると、新聞にのっている様々な情報に目を通し、政治や経済等の社会の動きを知ることができるから。

イ 新聞の切り抜きをすると、大学で他の学生たちと共通の話題を持ち、社会問題以外の日常的な話題の種類が増えるから。

ウ 新聞の切り抜きをすると、色々な新聞のニュースを大まかに読んで、大学の授業で新聞の読み比べができるから。

エ 新聞の切り抜きをすると、「情報感度」が上がって、他の人が知らないニュースを深く研究するようになるから。

問7 線④「当時はかなりの人が新聞を読んでいた」とありますが、そのことで、日本社会にどのようなよいことがありましたか。七十字以内で答えなさい。(、や。もふくみます)

問8 本文の内容に合わないものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 読者に向けた質問から文章を始めることによって、読者の関心を自然と引き付けている。

イ インターネットの長所を認めつつも、新聞の長所を具体例や比喩を用いて説明している。

ウ 筆者の意見が適切であることを示すために、自身の経験を具体例として提示している。

エ 現在あまり新聞が読まなくなった理由を、かつての社会の様子から明らかにしている。

〔二〕 次の各問いに答えなさい。

問1 次の①～⑤の□にあてはまる漢字と、□の中の漢字一字を組み合わせると、二字の熟語ができます。その熟語を答えなさい。ただし、どちらの漢字が上にきてもかまいませんが、□の中の漢字は一度しか使えません。

- ① ☐ 降って地固まる
- ② ☐ り目にたたりめ
- ③ 焼け ☐ に水
- ④ ☐ ここにあらず
- ⑤ ☐ から目薬

岩 臓 点 梅 級

問2 次の①～⑤の各文について、□に入れるのに最も適当な言葉を、後のア～キの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

- ① 田舎では、時間が□と流れているように感じる。
- ② 他人の作品を□そのまま真似る。
- ③ 友人との関係が□いかない。
- ④ 彼の病気は□治った。
- ⑤ 自宅から学校まで□五キロの距離だ。

- | | | |
|--------|--------|--------|
| ア しっくり | イ そっくり | ウ すっかり |
| カ きっかり | キ おっとり | エ がっかり |
| | | オ ゆったり |

問3 次の①～⑤の各文について、主語がない文にはアを、述語がない文にはイを、それぞれ書きなさい。

- ① 第一志望の中学校に合格した。
- ② すみません、それはわたしが……。
- ③ やっぱ無理だった。
- ④ こんにちは、お元気ですか。
- ⑤ ねえ、ちょっと来て。

〔三〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の「わたし（葉香）^{ようか}」は、半年前から急に声が出なくなってしまった。次第に友人たちも離れていき、孤独を感じていた「わたし」は、「ベストフレンド」という交流サイトを通じて、アメリカに住む高校生、大崎海渡と知り合う。大崎は自作の曲を演奏して「わたし」に送り、「わたし」は大崎に自作の詩を送る、というパソコン上での交流が続いていた。

ある日、大崎は、今度コンサートを開くために来日すること、そして、目が不自由であることを、「わたし」に打ち明けたのだった。

「ぼくはきみにあいたいとおもっています」――

「きみのこえをきかせてください」――

注1 ひらがなだけで書かれた二通のメールをもらってから、二週間以上が過ぎようとしている。

そのあとに届いた三通目のメールには、コンサートの案内状が添付されていた。大崎さんの電話番号と、東京で泊まっているホテルの名前と電話番号も書かれていた。

コンサートは、今からちょうど一週間後の土曜日、午後二時から。

コンサート会場になっている学校の場所も、行き方も、わかっている。その駅でおいたことはないけれど、いつも通っている。わたしの住んでいる町から、電車に乗って三十分ほどで行ける。

そして、きょうの夕方、大崎さんとご両親を乗せた飛行機は、成田空港に到着する。

今までずっと、地球の反対側に住んでいた人が、わたしの住んでいる国までやってくる。今までずっと、「いつか会いたい」と思っていた人が、電車に乗って会いに行ける町までやってくる。

それなのに、わたしは大崎さんに返事を書けないままにいる。

書きたい、伝えたい、思いは胸にあふれているのに、ことばにできない。

この二週間のあいだ、何度、メールを読みかえたことだろう。

何度、返事のメールを書きかけたことだろう。

でも、どうしても、最後まで書けなかった。

その理由は、たくさんあるような気もしたし、ひとつしかないような気もした。

たったひとつの理由とは――

それは、^①わたしが卑怯者だからだ。

おくびようで、弱虫で、正直じゃないからだ。

大崎さんの目が見えないことを知った日、わたしはすごく驚いた。頭の上から、空がドスンと落ちてきたようだった。見えないって、どういうことなんだろう。

目をぎゅっと閉じたまま、部屋のなかを歩いてみた。五分、いや、三分もたたないうちに、目をあけてしまった。

そうだったのか、あの人はこんな世界で生きてきたのか。

心細くて、心もとなくて、こんなにも不安な世界で。

それなのに、あんなにも明るく、あんなにも前向きに、わたしをなぐさめ、はげましてくれようとした。

そう思うと、^②いてもたってもいられないような気持ちになって、今すぐにでも受話器を取りあげて、電話をかけたくなった。

かけたって、何も言えないとわかっていても。

悶々とした気持ちのまま、^{注2}「小さい太郎の悲しみ」を読みかえしてみた。暗記までしていたというのに、あの最後に出てくる文章の意味を、わたしはこれまでまったく理解できていなかったのだと気づいた。

最後の章、第五章で、小さい太郎の胸に悲しみが広がったのは、おながが痛くて遊べない友だちや、海のむこうの村に引っこしていった友だちとちがって、安雄さんという年上の友だちが「大人の世界」に行ってしまったからだだった。まだ「子

どもの世界」にいる太郎とはべつ、世界に行ってしまった——それが、小さい太郎の悲しみの正体^④だったのだ。

つまり大崎さんは「見えない世界」にいる。見える人とは、別の世界に。そのことこそが彼^{かれ}にとって「泣くことのできない、泣いたって、どうしたって、消すことのできない悲しみ」だったのだ。

そんなことも知らないで、気づくこともできないで——

大崎さんの背負っている悲しみの大きさを想像すると、わたしの悩みなんて、かたつむりよりも小さな、そのへんにごろごろがっている、つまらない石ころみたいなもののように思えた。

恥^はずかしかった。今まで送った詩を全部^⑤消去してしまいたいほど、恥^はずかしかった。

わたしには、大崎さんに会いに行く資格なんて、ない。

わたしは目が見えるのに、なんにも見えていなかった。見ようとしなかった。

いつだって、自分のことばかり考えてきた。自分がしゃべれなくなったのは、まわりの人たちのせいだと決めつけてきた。まわりの人たちがわたしのことを、理解してくれないからだと思ってきた。

③ そんなわたしを、大崎さんに「見られる」のが、わたしはこわかった。

今もこわい。

きょうこそ返事を書くと思って、明るすぎるパソコンの画面を見つめている、この瞬間^{しゅんかん}も。

もう一度、ひらがなのメールを読みかえしてみた。

何度、読みかえしても、そのたびに、胸^{むね}が痛くなる。

大崎さんが正直に、わたしに自分を見せてくれているのに、わたしにはそれができない。

だから、わたしは卑怯者^{ひけつしゃ}なのだ。

このまま、卑怯者のままでいいの？

このまま、別れてしまってもいいの？

④ 「うみをわたるかぜと、いちまいのこのはは、けつきよく、あうこともできず、たがいのすがたをみることもできず、こえ

もかけあえないまま、とおく、とおく、うちゅうのかなたとかなたに、わかれわかれになってしまったのです。おわり」

そんなさびしい物語になってしまって、いいの？

今まで送りあつてきた詩と音楽が、宇宙のブラックホールにすいこまれたまま、消えてしまってもいいの？

あなたは、海^{うみ}を渡る風^{かぜ}さんに、会いたくないの？

——あいたい。

声が聞こえた。

自分の声だったのか、だれかの声だったのか、わからないけれど、たしかに聞こえた。

はつとして、思わず右手を喉^{のど}に当てていた。

今の声は、ここから出たものなのだろうか。

わたしの出した声？

これがわたしの声？

「かたつむりが殻^かに閉じこもっている状態ですね。本人に『外に出たい』『話したい』という強い欲求さえあれば、話せるようになります。葉香さんに必要なのは、その動機^{どうき}だけです。でもそれは、外から与^{あた}えられる動機ではなくて、内側から発生するものでなくてはならないのだと思います。いくら外から突^ついても、かたつむりが外に出たいと思わないかぎり、出てこないのといっしょです」

いつだったか、カウンセリングの先生がおかあさんにむかって、そんなことを言っていたのを思い出した。

そのときには「欲求」も「動機」も、わたしにはないと思っていたし、そもそもそんなことは、自分には関係ないと思っていた。

今はそうは思わない。

⑤ わたしには「よつきゆう」と「どうき」がある。

そしてそれは、とても強い。

返事を書くと思った。最後まで書いて、送ろう。わたしの「声」を、届けたい返事を、あの人に届けよう。
今ならまだ、まにあう。

(小手鞠るい『きみの声を聞かせて』)

注1 ひらがなだけで書かれた二通のメール 大崎は目が不自由なため、自分が話した言葉をひらがなに^{へんかん}変換するパソコンの機能を用いてメールを書いている。

注2 「小さい太郎の悲しみ」 新美南吉の童話。大崎は、この童話の一節である「しかし或る悲しみは泣くことができません。泣いたって、どうしたって消すことはできないのです。いま、小さい太郎の胸に広がった悲しみは泣くことのできない悲しみでした。」を、自分の曲のコメント欄に載せていた。

注3 海を渡る風 大崎海渡の、「ベストフレンド」という交流サイト上でのペンネーム。

問1 〰〰〰 線 a 〰 e の漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。

問2 〰 線 A 「心もなくて」、B 「悶々とした」の語句の意味として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- A ア 気持ちが沈んで
イ なやみ事がなくて
ウ 頼りなく心配で
エ はっきり見えなくて

- B ア いらいらした
イ 納得できない
ウ ふゆかいな
エ 思いなやんだ

問3 〰 線 ① 「わたしが卑怯者だからだ。おくびようで、弱虫で、正直じゃないからだ」とありますが、「わたし」が自分のことをそう思うのはなぜですか。左の文の I と II に入れるのに適当な内容を、それぞれ三十字以内で書きなさい。(、をふくみます)

大崎さんは I のに、「わたし」は II から。

問4 〰 線 ② 「いてもたってもいられないような気持ち」になったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 目が見えない大崎さんが、日本でコンサートを行うために、毎日明るく前向きに努力を重ねていたということを知ったから。

イ 目が見えない大崎さんに会うべきかどうか、自分ではどうしても決められないので、大崎さんに決めてもらいたいと思ったから。

ウ 大崎さんが、目が見えないという苦勞を背負っているにも関わらず、「わたし」を元気づけようとしてくれたことに気づいたから。

エ 大崎さんは目が見えないという不安に押しつぶされそうになりながら生活しているので、元気づけてあげたかったから。

問5

——線③「そんなわたし」とは、どういう「わたし」ですか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 自分のことを理解してくれるただ一人の存在だと思っていた大崎さんが、実は目が見えないということを知り、期待外れだと思ってしまった「わたし」。

イ 大崎さんが「わたし」に会いたいと言ってくれているのに、自分の外見に自信が持てず、会いたいという気持ちを素直に伝えられない「わたし」。

ウ 自分が幸せになることだけを考え、大崎さんや周囲の人たちはもっと「わたし」に気をつかって親切に接するべきだと不満に思っていた「わたし」。

エ 大崎さんや周囲の人たちのことを深く考えず、自分のことだけ考え、自分の声が出なくなったのは周囲の人たちのせいだと決めつけていた「わたし」。

問6

——線④「うみをわたるかぜと……わかれわかれになってしまったのでした」とは、どういうことを表していますか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 大崎さんと「わたし」は、会える機会があったにもかかわらず会わなかったことで、今後二人が交流することもなくなってしまうだろうということ。

イ 大崎さんと「わたし」は、日本で会う約束をしていたが、大崎さんはコンサートで忙しかったため「わたし」に会いに来てくれなかったということ。

ウ 大崎さんは「わたし」に会いたがっていたが、「わたし」が会うことを拒否したため、大崎さんと「わたし」は、仲が悪くなってしまうたということ。

エ 大崎さんはアメリカに、そして「わたし」は日本に住んでいるため、どれほど会いたいと願っても二人が直接会えることはないだろうということ。

問7

——線⑤「わたしには『よつきゅう』と『どうき』がある」とは、どういうことですか。四十字以内で説明しなさい。(、や。もふくみます)

解答用紙

得点

得	点

問 2	A	問 3	
	B		

問
3

B

最初				
最後				

最後

[illegible]

100

[illegible]

①	
②	
③	
④	
⑤	

①	
②	
③	
④	
⑤	

①
②
③
④
⑤

問 2		(e)		(a)
				いた
	A			(b)
	B			くて
				(c)
				(d)

問
2

B

[illegible][illegible]

[http://dx.doi.org/10.1016/j.jmb.2010.07.008](#)

104

[illegible]